場の発達障害

長井　潔

精神障害やひきこもりは医療に診てもらうべき個人の領分と見られがちだ。だが実際の発症や事件化は、所属集団や家族などの対人関係の「場」で現れる。場や構成員の相互作用が当事者に与える「影」を、支援の仕事をしていてうっすらとは感じてきた。例えば子を支えようとする親の行動が、はた目には子の育ちを妨害しているように見えた。

再びこの問題と向き合うきっかけができた。娘が大学で診断された発達障害とは何か、調べたことからだ。

発達障害には自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如・多動性障害、学習障害などがある。娘は注意欠如だった。例えば中学の時の算数テストで、応用問題が解けるのに単純な計算を何度も間違えていた。計算ができないのではなく注意を維持できない特性の表れだったと、ようやく気付けた。

発達障害の人はこれらに加え自閉症スペクトラム障害を併せ持つと言われる。周囲の人間関係にうまく合わせられない、「空気を読めない」ことだと最近は簡単に説明される。

しかしこれについては娘からは全く心当たりがない。いつも家族の会話を弾ませてくれる子だ。

空気と言えば、高校で娘が授業をボイコットした事件があった。

運動全般は苦手な娘だが、中学の卓球部で県大会3位になった。高校に部はなかったが選択体育で卓球もすると聞き、久しぶりにしたいと受講を決めた。その後卓球はしないことに変わった。それでも一回目の授業に顔を出した。体育館に入った瞬間に運動のできる面々が娘を見て「なぜおまえがここに」と一斉に視線を投げ、そして娘はボイコットを決めた。その場に集まったものが放つ一瞬の空気にやられたのだという。

空気とは集団の本音を匂わす言外の態度と言えるだろうか。しかしこの時も娘は空気を読んだ。「空気を読めない」とは何か。ますます気になった。ある事例解説に出会った。

「ある女子中学生は少し付き合いが悪い。部活で仲良しの他の女子たちから、全体集合前にグループだけで集まろうと誘われたが『面倒くさいから』と断った。そのため彼女はグループから『変わっている』とみなされ、仲間はずれにされて部活にいづらくなった。

このように自閉症スペクトラム障害の人は、自分のやり方、関心、ペースを最優先させたがる。仲良くなるための臨機応変な対人関係には興味がないか、苦手だ。空気を読まな

いため集団の中で浮いてしまい、学校に行きづらくもなる。大人からは困った行動に見えるが、本当に困っているのは本人だとの視点も必要だ」

何度読んでも違和感は消えなかった。これは私にはいじめ事件としか読めなかった。場の問題が放置されているではないか。

調べてみた。実際にも自閉症スペクトラム障害の人はいじめに合うことが多いという。解説は特殊な事例ではなかった。

確かにたとえ身体障害であっても、本人にとって障害となる内容やその重さは、介助の善し悪しなど所属集団の環境によって変わるだろう。しかし自閉症スペクトラム障害は定義からして集団特性に依存してはいないか。集団は個々に異なる。空気以外に言葉でも十分に意思疎通を図る集団では、この障害は現れないのではないか。

それでも医療は個人にのみ着眼すれば良しなのか。「影」が透けて見えたような気がした。見過ごせない、場の問題としてとことん追求すると決めた。

集団を追った。

いじめの文化差の研究によれば、欧米でのいじめでは力の強い個人が弱い個人を攻撃する。例えば「ドラえもん」のジャイアンだ。

一方日本ではいじめる者、いじめられる者、傍観者、無関心者の四者でいじめが構成される、四層構造理論が当てはまりやすい。無視や仲間外れで集団内の人間関係から除外する。仲間内の空気を読むようになる小学高学年から始まり、空気を読めば回避もできる。

いじめへの反応も文化によって異なる。欧米では、いじめを止めに入ると答える子供が年齢に応じて増える。基本的な人間関係が相互に独立的であるため、周囲に同調したり、自分を抑えて妥協することは少ない。特にアメリカのような多民族、多文化社会はルールで動かないと成り立たないため、いじめを止めに入れる場合は多い。

ところが日本ではいじめを止めに入らない子どもの割合が年齢に比して増える。いじめを見ても、「空気を乱す者」として制裁を受けると読み、怖くて止めに入られない。

海外生活した発達障害の人の多くは「日本よりはるかに住みやすかった」と言うらしい。海外では読むべき空気がないからだろう。

日本で発達障害のいじめ事例が多いのは障害のせいではなく、障害を抱える個人の扱われ方に問題があるからだ。「空気を読めない」ことは個人の特性かもしれないが、読ませようとする日本の集団特性の方が先にある。

中根千枝の社会構造論「タテ社会の人間関係（１９６７年）」がこれをよく伝えているようだ。中根はインド社会を調査し、同じカースト同士の横のつながりの広さに比べ、日本の集団の狭さが対極にあると着想した。

中根によれば、日本は極端に場の原理を優先する「場の社会」だ。日本人は個人として

の認識は弱く、家族や会社の一部署など、数名からなる小集団の場に属するとの認識が強い。小集団は長期にわたり醸成された仲間意識を基礎にする。簡単に他に移ることもできないし、一対一の個人同士で親しいわけでもない。みなが仲良しというより、とにかく仲良くやらなければならない関係だ。場の社会には明示的な枠がない。それゆえ内部で絶えず個々人が接触して感情的につながらねばならない。「ウチの者」と比べて「ヨソ者」は人として見ないような、極端に対照的な人間関係を作ってしまう。

この６０年代の社会構造論を用いて現代のいじめを読んでみる。親しみの持てるのが小集団単位ならば学級でもその一部、ちょうど事例にあった部活の仲良しグループくらいの規模だ。常に接触して感情的につながろうとする。全体集合の前に仲間だけで集まろうとするくらいだ。これが上手く働かない個人に対しては発達障害であってもなくても、仲間外しに至るだろう。個人の認識は弱く小集団単位で行動が認められることは、個対個のいじめよりも四層構造理論にあたるいじめを誘う。ヨソ者を人として見ないとは、いじめでなぜ無関心層が発生するかを説明する。別の小集団に属するヨソ者だからいじめられていても無関心なのだ。

空気を読むとは「場の空気を読む」ことだ。中根の社会構造論は、空気を読ませる集団と個人との関係をすでに指摘していたのだ。

発表当時は企業組織論としても読まれた。例えば日本の組織にありがちな部門中心主義（セクショナリズム）は、全体を見ず自部署の最適だけを考える態度だが、小集団での行動の結果だと理解できる。その他いじめや過労死などにも小集団の特性は関係するだろう。だが近年は法令順守（コンプライアンス）も叫ばれてきた。明文化したルールに則るから空気を読ませる余地は減ってきただろう。

一方「空気を読めない」は昨今の若者中心に言われる。「ＫＹ（空気読めない）」が流行語大賞にノミネートされたのは２００７年だから、ここ十数年の傾向だろう。

彼らが所属する場は家族や学級や部活といった共同体組織（ゲマインシャフト）だ。機能に縛られず利益を求めないこれらの集団に、空気は収斂し膨らんできたのではないか。

娘の授業ボイコット事件の後日談だ。

空気を読んで悟った娘は教師に訴え、選択体育だけ保健室登校を認めてもらった。その後日、体育の教師と廊下で会った時に

「誰かにいじめられていたからやめたんだろう」と言われた。

これは個対個のいじめしか頭にない発言だ。そろそろ結論づけていいだろう。場の問題を個の問題にすり替えようとする、この無意識こそが「影」の正体だ。

教師でさえ場を見ないならばさぞかし学級で空気は膨らんだだろう。空気を読ませ、小集団内での仲良しを強いる学級の場は、生徒全員を息苦しくさせてきただろう。

このような日本で、自閉症スペクトラム障害は、むしろ学級での生きづらさを映しだす

鏡として立ち現れたと言える。空気を読まず自らの合理に従う者は時に、場を救うかもしれない。なのに場は彼らを全く扱えていない。

場が発達障害なのだ。

本来は学級の枠組みこそ変わるべきだ。

例えば日本ではいじめられた生徒の転校が認められている。これに対し海外の識者が「転校すべきはいじめた側ではないか」と異を唱えたという話がある。示唆的ではある。

とはいえ、日本の集団特性は海外と比することではじめて照らし出された。それこそ空気でありすぐには変わらない伝統でもある。だから、まず大事なことは、場の問題により困難に陥りそうな子にとって、せめて家庭が安全で安心な場であることだろう。